

# 小田原教育

第108号

平成20年3月17日



## ヨシガモ〈冬鳥〉

灰色のからだに茶色い頭。

目の後ろに長い緑色の羽があり、ナポレオンの帽子のように見えます。くちばしは黒く、白い喉に黒い輪があります。酒匂川の取水堰付近で観察することができます。

## 目 次

### 巻頭言

#### 「学習の心得」

小田原市教育研究所運営協議会委員長 ..... 2

### 1 小さなころみ

#### ①「小田原の自然ガイドブックの改訂にあたって」

「小田原の自然」改訂に関する研究員 ..... 3

### 2 学びの架け橋

#### ①「個に応じた指導の工夫～ロボットを制作しロボットコンテストをしよう～」

技術・家庭 プロジェクト研修員 ..... 4

#### ②「小・中学校における系統的な学習指導のあり方～表現領域を中心として～」

音楽 プロジェクト研修員 ..... 5

#### ③「小・中が連携した英語教育の実践・研究」

英語・英語活動 プロジェクト研修員 ..... 6

### 3 教育相談の現場から

#### 「校内相談体制の充実を」

教育研究所教育相談員 ..... 7

### 4 ある教室から

#### 「知的好奇心や探求心を育てる」

学校教育課指導主事 ..... 8

### 5 研究所だより

研修事業より 教育研究所指導主事 ..... 9

共同研究より 教育研究所指導主事 ..... 10

## 学 習 の 心 得

小田原市教育研究所運営協議会

委員長

今、切れる子の生活環境や全国学力・学習状況調査の結果から食事環境・食育の重要性が叫ばれています。日本には食事の時には「いただきます」「ごちそうさま」という生活習慣がありますが、外国ではなかなかそれに相当する言葉は見つかりません。しかし、食事は人類共通の生存欲求であり、それぞれの国で形は違いますが食事に対する生活習慣が確立されています。

さて、「学習の心得・習慣」について考えてみると十分に確立されていないのが現状ではないかと思います。各学校においては、不登校、いじめをはじめとした様々な生徒指導上の課題を抱えており、学習規律の確立が重要であると規律に重点が置かれていると思います。

規律は強制の意味合いが強く、心得は自発的にわきまえなければならないという主体的な「心構え」であり、授業を受ける心得は家庭で教えておくべき教育のための家庭心得の上に成り立っていると言えます。

教育についての家庭心得は、今始まったことではなく、古く明治の頃からあったことです。ある雑誌に埼玉県のある高等小学校における「家庭心得」の「保護者への御注意」の一部が次のように紹介されていました。

「拝啓諺にも教育の道は、家庭の教えで芽を出し、学校の教へで花が咲き、世間の教えで實が成ると申す程にて有之候へば、学校と家庭とは、常に相一致し、同じ方向に相進み……朝夕深く御注意成下され度候也」。「自修の習慣を作るべし」。とあり、学校が家庭に情報を発信し、連携して学習

の心得の確立に向け取り組んでいくということです。

家庭の教育力の向上が叫ばれている昨今、家庭・学校が連携し家庭心得を見直し、再構築していく必要があると考えます。

それでは、家庭でしつけておくべき学習の心得はと言うと、「早寝、早起き、朝ご飯」といった基本的生活習慣の上に成り立ちますが、中でも授業の始まりの心得の基本的なものとして「遅刻をしない」「礼」「姿勢」の三つが挙げられると思います。

「遅刻をしない」は当然だと思います。

「礼」と「姿勢」について考えてみると、授業の始めの「礼」については、自分はどういう「場」にいるのか、どういう「気持」でいるのかを意識させることだと思います。「場」については「教室」であり自分の家ではないということ、他者への配慮が必要ということを意識させることだと思います。次に「姿勢」を正しくすると脳への血流がよくなり、前向きの心（やる気、意欲）が湧くといわれています。

このように基本的生活習慣の上に成り立つ学習の心得ですが、家庭・学校が連携し、家庭ですること、学校ですることを明確にし、繰り返しの指導が大切と考えます。また、心得というのは自発的・主体的なものであり、自然に身につくものではありません。親、教師が意図的に関わるのが大切です。

そう考えると私たち教師の「指導の心得」も大切になり、日々の研鑽が必要と考えます。



## 小田原の自然ガイドブックの改訂にあたって

「小田原の自然」改訂に関する研究員

平成9年度に小田原の自然ガイドブック「小田原の自然」が全市の小学校4年生に配布され、理科の副読本として活用されはじめてから10年が経ちました。

その間に市街地の様子も大きく変化しましたし、地学の分野では新しい箱根火山形成論も出され、記載の変更を要する部分も出てきました。

また、活用講座「小田原の自然」観察会などで研究員の方々が撮り貯めた自然物の写真などの資料も年々増えてきていました。

そこで、次のように重点を定め、改訂を行うことといたしました。

- ① この本が小学校だけでなく、中学校の理科の副読本であるという位置付けを明確にし、活用を図るようにする。
- ② 最初に配布されるのが4年生なので、小学校児童の興味関心を高められるようにする。
- ③ 地域別の自然をより調べやすくなるような工夫をする。
- ④ より多くの自然を紹介するとともに、身近な公園などの施設で自然に親しめるようなガイドを加える。
- ⑤ 先進科学研究の成果を反映させる。

次に重点の具体策ですが、①については、記名欄に小学校名と中学校名を書くようにしました。それによって、配布された4年生の時だけではなく、それ以後の学年でも理科や総合学習に使う本であるという位置付けをはっきりさせました。この本はそれ

以上に、大人になってからも小田原市民として生涯活用してほしい郷土の自然ガイドブックなのです。

②については、イラストによる男女二人の子どものキャラクターを登場させました。この二人は、あちこちの観察場所でも登場し、自然観察の楽しさを伝えるようにしています。

③は、地域別に色分けをし、希望の場所の自然を探してすぐに本を開けられるようにしました。

④は、増頁分の紙面を活用してより多くの自然物の生態写真を紹介しました。特に昆虫の紹介を充実させました。

⑤は、地質地形の分野で新しい箱根火山形成論に準拠した改訂をしました。

その他、表紙のベースの色を今までの朝焼け色から白雲色の白色とし、若草色や水色の縁取りの中に市の鳥「コアジサシ」を配置しました。

新しくイメージチェンジしたこの本を片手に学習や生活の中で小田原の豊かな自然と親しんでほしいと願っております。



ー写真 カラスウリー  
(文責：)

## 個に応じた指導の工夫

～ロボットを制作しロボットコンテストをしよう～

プロジェクト研修員（技術・家庭科部会）

### 1. はじめに

本研究では、指導者一人で授業を行う場合の個に応じた指導のあり方を探りたいと考えた。教材や指導法を工夫し、生徒の学習状況を的確に見取り、生徒個々の学習が成立するような技術科の個に応じた指導について、校内ロボットコンテストの実践（ものづくり）を通し研究を行った。

### 2. 実践

ロボットコンテストは、その学習過程で機械と電気の基礎的な内容だけでなく、生徒が自ら意欲と課題を持って問題解決を図り、実践力を高めることができる題材である。この学習は、ロボットにこういう動きをさせたいという生徒の構想を実際のしくみとして考え、それを試行して検討していくという学習活動を何度も循環させていく学習形態である。この学習において、個に応じた指導が最も必要なのは、構想時、検討時、試行後である。そのとき、生徒が必要とする情報を的確に提供できる指導をすることに力点をおいて研究を行った。

授業実践した中から、校内ロボコン特許について説明したい。

#### ◇校内ロボコン特許

校内で行うロボットコンテストの授業で、生徒が考えたロボット



作りについての独自性のあるアイデアを特許として申請させた。これをクラスで発表することによって、同じ機構を考えているグループ相互

でアドバイスできるようにし、その機構を理解した上で修正が加えられるようにした。



さらに申請された特許は過去の生徒の分とあわせてデータベース化し、誰でも見ることができるようにし、生徒がロボットの機構を考える上での参考になるようにした。このことにより1つでも多くのピンポン球をすくうことができるロボットを作りたいという意欲の向上と発展的な学習へとつなげることができた。

生徒のワークシートに書かれた感想は、  
・ロボット作りは思ったよりも楽しくて、試行錯誤して作り出すおもしろさを知った。修正し始めるとどこもかしこも今よりもっと良くしたくなってきて、きりがなく大変だった。

とあるように、よりよい機構を持ったロボットを作るのに役立ち、より良いものを作りたいという生徒の学習意欲を高めることもできた。

### 3. まとめ

今も昔も「自立した生活者を育てる」という根底に流れる教科のねらいは変わっていない。個に応じた指導等の授業改善の取り組みの答えは、子どもたちが出してくれる。教科での様々な学習が子どもたちの何十年後の人生に役立つ広がりをもつものとなることを願いながら、今後も教科指導を行っていきたい。

（文責：）



# 小・中学校における系統的な学習指導のあり方

～表現領域を中心として～

プロジェクト研修員（音楽部会）

## 1 はじめに

私たち音楽科では、児童・生徒がより意欲的に、また、系統的に学習を進めていくためにはどのような事が必要であるか、表現領域を中心として、研究してきた。

## 2 3年間の研究内容

平成17年度の研究では、小・中を見通した指導計画の検討を中心に研究を進めてきた。指導要領の内容を熟考し、教科書の中から最も効果的に指導できると思われる曲を選び、学年別系統表にまとめることを行った。

平成18年度は、系統表を元に、小学校・中学校の両方において、授業実践を行った。同じ題材を選び発達段階に応じた学習指導について話し合うことができた。合わせて、児童・生徒がどんなところでつまづいているのかを把握するため、アンケート調査を実施した。その結果から音楽科教育の課題が見えてきた。

19年度は、アンケート調査の結果や授業実践から、変声期における表現活動に的を絞り、研究を進めてきた。

## 3 授業実践から

変声期に差し掛かった児童・生徒は、疎外感を味わいやすい。そんな児童・生徒も興味を持って学習に取り組める内容を考えていった。

＜指導の重点＞

①曲想を考えるために指揮に挑戦する。

②同声2部と混声3部の合唱を聴き比べる。

③グループ・パート練習には、音源を用意し移調可能にしておく。

④自分達の演奏を録音・録画して客観的に聴いてみる。

＜実践から＞

①変声期には、無理をして発声することせず、自分の歌える範囲で参加すること。

②発声ばかりでなく、歌唱の他要素(リズム・歌詞・曲想など)を扱うことで、音楽への興味関心を持たせ続けること。

③変声期に入っても歌を嫌いにしない下地を作っておくこと。

## 4 おわりに

小学校で、歌う楽しさや達成感を十分味わうことにより、中学校での学習にスムーズに移行できるとの話がある。

音楽を楽しいものと感じ、達成感を得られるような学習こそが音楽の基礎になっていくのではないかと考えている。

題材の精選、人前で演奏すること、小・中学校の情報交換等、研究の中で見えてきた課題を今後も研究し、豊かで楽しい学習指導を目指していきたい。

（文責：）



## 小・中が連携した英語教育の実践・研究

プロジェクト研修員（英語・英語活動部会）

### はじめに

「小学校での英語活動のために、中学校の英語科教員ができることはないだろうか？」そのような発想から、平成17年度の研究をスタートした。

小学校においては、国際理解教育の名のもとに、英語活動を行っていた。教科として学習が始まる中学校。ところが、中学校の英語科教員は、その活動や実態を分からぬまま、授業をスタートしているのが現状であった。

そのようなことから、市内全小学校へ「国際理解教育に関するアンケート」を依頼し、その実態を調査することから始めた。

小学校段階での英語活動の把握が中学校での教科指導に役立つのではないかと。また、小学校側としては英語活動に当たって教材ならびに指導案を今以上に必要とするであろうことから、情報提供の場を作りたいと考えての研究であった。

### アンケート調査から見えてきたもの

各校においては、「英語活動」の時数や内容の定着等、差こそあれ、地道に実践し、子どもや保護者から支持を得ていることが見て取れた。学級担任が指導案を作成し、中心となっている推進校の実践をうまく採り入れることが課題としてあげられた。

### 中学校1年生を対象とした

#### 「小学校の英語活動に関するアンケート」

平成18年度は、小学校の「英語活動」が、教師サイドではなく、子どもの目にどのように映っていたのかを考察するため、

2つの中学校区の中学1年生を対象に、アンケート調査を実施した。

①小学校5・6年次の英語活動の内容

②英語を「書く活動」の有無の調査

これについては、研修員としては、書くことにあまり重点を置かないことが良いと考えているが、文字としての印象がどこまで残っていたのかを調査した。

### 中学校教師による小学校で授業実践

小学校で授業実践ならびに公開授業を行う中で、今後の課題や新たな方向性が見いだせるのではないかと考え、未だかつてあまり例のない中学校教師による小学校での「英語活動」を行った。授業を終え、小学校の先生方からは、このような機会をまた作って欲しいとの声が寄せられた。

### 小・中が連携した英語教育の実践・研究ならびに今後の課題

今年度、小学校教諭の2名が加わり、より実態をつかんだ上で研究を進めることができた。小学校と中学校が互いの意識改革をどのように具体化し連携していくか。小学校の英語活動をどのように生かしていくか。また、中学校英語教育に結びつくにはどのような小学校英語活動が考えられるか等、課題とすべきものがいくつかある。しかしながら、情報交換をし、より連携を深めることが、小学校の先生にとって負担を軽減するものと痛感している。無理せず、ゆっくりと小学校の先生が取り組めるように。  
(文責：)



## 校内相談体制の充実を

教育研究所教育相談員

「友達とのトラブルで学校に行けなくなった」「朝起きると、学校に足が向かない」などと、教育研究所に相談電話が入ります。

教育研究所では、悩んでいる保護者と児童・生徒たちの相談にのっています。

教育相談電話、研究所における相談、訪問相談で対応し、支援をしています。もちろん、学校・地域・専門機関他との連携も行っています。

1 2月分だけの相談件数は63件、254回にのぼります。その内、49件、232回が不登校に関する相談となっています。このような相談業務を通して、教育相談員から学校に電話をしたり、訪問したりして、支援をお願いしています。

学校では、定期的に支援会議を開催、随時、ケース会議などに取り組んでいる事と思いますが、是非、「聴く」「未然防止・共有」についても振り返りながら、今後の「不登校児童・生徒」への支援をお願いしたいと考えます。

### ＜「聴く」ことを大切に＞

教育活動において、学習の基本は「聴く」ことにあると考えます。「聴く」ということは、集中して理解することです。ですから、「聴く」ことにより、「訊く」につながっていくことが考えられます。

教育相談を受けるときも、相手の話を「聴く」ことから始めていきます。その時に、教員側から説得するような話が先行してしまうと、相談者は嫌気がさしてきます。じっくり聴いてあげる寛容さが必要とされます。内容によって、誤解さ

れている時もあります。まずは、「聴く」、そして、いつでも新鮮な気持ちで対応していくことが大切なことです。

### ＜「未然防止」そして「共有」＞

各学校では、校内支援会議、ケース会議を開いていると思いますが、その前段階で取り組んでいくことがあります。

一日でも欠席したら、すぐ対応することです。学年会議でも話題にしながら、相談体制をとっていきます。それから、基礎基本の定着も大切なことです。また、児童・生徒たちが満足感を得られるような工夫も必要です。

取り組まれているとは思いますが、これらのことは「不登校」未然防止にもつながります。それでも欠席が続きましたら、支援会議を設定します。そこで話し合った内容を全職員が「共有」して児童・生徒への支援にあたることが求められます。そして、小学校の支援情報を中学校へ提供してください。相談体制が充実することで、保護者と児童・生徒も安心して学校生活を送ることができ、学校も変わっていきます。

過日、おばあちゃんが心配そうな顔をして研究所に来られました。やがて、お孫さんの相談が終わって帰ろうとした時、おばあちゃんの顔は、穏やかな顔になっていました。

「人とのつながりが人を育てる」といわれます。学校での学びはまさに大切な時間です。教職員一人ひとりの意識改革と校内相談体制の充実を図りながら支援していきたいものです。



## 知的好奇心や探求心を育てる

学校教育課 指導主事

先生が子どもの興味を引くようにポケットから手品のごとく卵を取り出した。そして、おもむろに数個の卵を立てた状態にして、上に板を置き、マグカップ、水入りバケツ、10kgの紙の束…と1つ1つ載せていく。「絶対割れるよ。」「もう無理。」「今度こそ割れる。」そんな子どもたちの予想と期待を裏切って、先生が上にのっても割れない卵。「なぜ。」「これ本当に卵？」不思議そうな顔、顔、顔。1つの卵を割って本当に生卵であることを確認する。「あれ、卵って硬い。」子どもたちがそう思いはじめる。このようにして、小学校6年生の理科「水溶液の性質」の第1時間目が始まった。

「今日は、卵となぞの液体を使って水溶液の学習をします。」「水溶液って何ですか。」事前の調査より水溶液についての学習の理解が十分でないことから、ここで、5年生の学習の復習。また、水溶液には危険なものもあることから、しっかりと手際よく安全面の確認を行っていく。

そして、いよいよ実験の始まり。なぞの水溶液に卵を入れた瞬間、ビーカーから勢いよく泡があふれ出す。理科室中が驚きの声であふれる。「うわー、すごい。」「シュワ、シュワしている。」「コーラフロートみたいだ。」「あれ、溶けている。」子どもたちが目を輝かせながら、口々に叫ぶ。その後、メモを取りながら、食い入るように卵の入ったビーカーを見つめ続ける。どの子どもも目の前で起こる卵の不思議な変化に心を奪われている。

その後のグループの意見交換では、「卵の殻を溶かすなぞの水溶液はなんだろう。」「他にはどんなものが溶けるのだろう。もっと知りたい。」「他にはどのような水溶液があるのか調べてみたい。」次々に発言していく。これから水溶液について学習していくことを確認して授業は終わった。

この授業で、子どもたちは、2度、自分のイメージや考えといった先行経験と矛盾する事象と出会いました。

1度目は、簡単に割ることができる卵の殻が意外と硬かったこと、そして、2度目は、硬いと思いはじめた卵の殻がなぞの水溶液に簡単に溶けてしまったことでした。この2度の先行経験と矛盾する事象により、子どもたちは、自ら「なぜだろう」「どうしてだろう。」という疑問を持ち「もっと知りたい。」「調べたい。」「調べなくては」といった必然性・必要性に裏付けられた問題意識を持つことができたのではないのでしょうか。知的好奇心が揺さぶられ、子どもたちの目が輝いた授業でした。

子どもたちの理科離れが叫ばれてから久しい中、この授業は、発見や驚きがあり子どもたちが自ら学びたい(知りたい、確かめたい)と思える授業を行っていくことの大切さをあらためて教えてくれました。





## 研究所だより ～研修事業より～



教育研究所研修事業の今年度の取り組みを紹介します。子どもたちを取り巻く環境がめまぐるしく変化する中、小田原の子どもたちの幸せのために、先生方は頑張っています！

教育研究所指導主事



### ☆☆プロジェクト研修☆☆

教科指導の専門性をより高め、小田原市の教育活動のリーダーとして活躍していただくことを目的としたプロジェクト研修も、今年度は各部会とも3年目のまとめの年を迎えました。今日的課題を受けた小・中連携のテーマを設定し、研究に取り組んできたわけですが、その成果を10部会ともに公開授業の形で発表しました。小田原市内はもちろん足柄下郡からも多くの先生方が参観され、研究の成果を発信することができました。

研修員の先生方には、熱心に研究を進めていただきましたが、その研究の内容は、新学習指導要領に込められた理念を先取りしたものであり、これからの教科指導に必要な不可欠なものだと思います。

この研究の成果を小田原市の先生方の指導力向上につなげていくために、教育委員会が努力しなくてはならないと強く感じました。

#### 【プロジェクト研修員の感想】

- ・小中連携の大切さを知った。学習内容の系統性を洗い出すことは意味がある
- ・公開授業は研究の発信方法として最良である
- ・小中の教員がともに研究する機会は必要だ
- ・小中それぞれの教科指導を深められた
- ・小中の持つ教科指導の良さや特性を理解することで、真の連携に近づく
- ・小中連携の教科指導研究を広めていくことは、中1ギャップの解消につながっていく
- ・チームで研究する楽しさと刺激を得た

| 教科等         | テーマ                                       |
|-------------|-------------------------------------------|
| 国語          | 小・中学校の連携をめざした国語の学習<br>～「書く」力を中心として～       |
| 社会          | 学習意欲を喚起する教材、学習活動のあり方                      |
| 算数・数学       | 小・中の算数・数学指導の連携を図る<br>～関数指導の系統性と授業実践～      |
| 理科          | 理科好きな子を育てる学習の工夫<br>～小・中の理科学習を通して～         |
| 音楽          | 小・中学校における系統的な学習指導の在り方<br>～表現領域を中心として～     |
| 保健体育        | 小・中学校の系統を考えた体育科学習                         |
| 技術・家庭       | 実践的・体験的な活動を通して、主体的に学ぶ<br>子どもを育てるための指導法の工夫 |
| 英語・<br>英語活動 | 小・中が連携した英語教育の実践・研究                        |
| 道徳          | 豊かな心を育む道徳の時間をめざして                         |
| 特別支援<br>教育  | 小・中学校における自立に向けた授業づくり                      |

### ☆☆パワーアップ研修☆☆

教職への情熱や意欲を持つ若い先生の力を高めるための個別研修としてパワーアップ研修が今年度から始まりました。校長会と連携した研修事業ですが、今年度は、小学校6名、中学校4名の先生方が研修を受けました。

個々のニーズに合わせ、研修相談員が学校訪問する形の新しい研修方法を取り入れました。授業研究・事例研究と明日からの実践につながる研修となりました。



## 研究所だより ～共同研究より～



教育研究所では研究所の機能をいかした共同研究や教育相談事業に取り組んでいます。

教育研究所指導主事

### ◇◇共同研究◇◇

今年度は6本の共同研究に取り組んでいますが、そのうち5本がまとめの年となりました。研究成果は、次のような方法で皆さんにお伝えし、広く共有していきたいと考えています。

- ①「郷土読本小田原」の改訂に関する研究  
→改訂したものが各中学校に届きます。
- ②「小田原の自然」の改訂に関する研究  
→大幅に改訂されたものが、再来年度各小学校に届きます。
- ③「幼・小・中生活実態調査に関する研究」  
→研究冊子を4月以降、各園・学校に送ります。また平成20年度神奈川県教育研究所連盟発表大会で提案をします。
- ④「中学校学級経営に関する研究」  
→研究冊子を4月以降、各園・学校に送ります。今日的課題を踏まえた内容ですので、ご活用ください。
- ⑤「不登校生徒を対象とした学習支援のあり方に関する研究」  
→平成19年度神奈川県教育研究所連盟研究協議会「教育相談・支援教育部会」で研究成果を報告しました。研究冊子は各校に渡っています。また「学習支援シート・ワークシート」は、各中学校教育相談コーディネーターの先生にお渡ししています。ご活用ください。

### ◇◇神奈川県教育研究所連盟 研究協議会◇◇

2月21日、平成19年度神奈川県教育研究所連盟研究協議会「教育相談・支援教育部会」を小田原市役所で開催しました。15機関70名という参加の中、次のような内容で行い、数多くのご意見をいただきました。

### ○研究報告・事業報告及び協議、講演

- (1)「不登校生徒を対象とした学習支援のあり方に関する研究」

小田原市教育研究所共同研究員

- (2)「小田原市不登校対策強化事業」

小田原市教育研究所指導主事

- (3)講演「不登校児童・生徒と教育相談」

小児科医院院長

### ○感想・意見等

- ・ワークシートや学習支援シートを活用しての不登校生徒のサポートが、とても興味深かった。ステップを踏んだきめ細かな対応が羨ましい。
- ・不登校生徒訪問相談員の取組に、とても関心を持った。また、研究員の発表事例で、子どもの校内の居場所の確保の取組が参考になった。
- ・不登校対策を学校評価の対象として全国平均を下回るように具体的な努力の大切さを痛感した。
- ・実際に不登校児童を担任しているが、同じ思いで日々悩まれている先生が多いことも力になった。少しずつあせらず、周りの方とのつながりを大切にしながら頑張っていこうと思った。

**教育相談指導学級では3月を「学校復帰強化月間」として支援を行っていますので学校とのさらなる連携をお願いします！**

小田原教育 第108号

発行日 平成20年3月17日（月）

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 小宮 郁夫

〒250-8555 小田原市荻窪 300

電話 33-1730

研究所ホームページアドレス

[http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku\\_ken/index.html](http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html)